

令和7年度 幼児教育研修（年齢別担任研修4歳児・第3回）

「子どもの発達と保育者の関わりについて」

～4歳児の豊かな体験が広がる保育～

日時：令和7年10月17日（金）15:00～17:00

会場：足立区役所 庁舎ホール

講師：帝京科学大学 非常勤講師 日色 智絵 氏



豊かな体験が広がるきっかけや要因

ポイント

- ・自然との関わりから広がる姿
- ・仲間との共有の場
- ・同じものを身に付ける
- ・同じものをもつ
- ・5歳児との関わりから広がる姿
- ・表現遊びから広がる姿
- ・ルールのある遊び、運動的な遊び
- ・家庭での体験から広がる姿

これらの視点は
絡み合っている

★自他との違いに気付く時期。自分の興味があることを好きな相手と（または一人で）好きな場所で心ゆくまで遊ぶことが大切。

★好きな遊びや好きな友達がはっきりしてくる。豊かな体験につなげるためには、友達や好きな遊びが広がる機会も必要である。

★友達と関わる楽しさを味わうと同時に、思いや考えがぶつかることも多い時期。友達の思いに気付く大事な時期と捉え、それぞれの思いを受容し、相手の思いに気付けるように関わる。

この時期に丁寧に関わっていくと、子どもたちは、自ら相手の思いを理解しようとし、自分たちで解決できるようになっていく。



自然とのかかわり

体験の深まり

試す→作る→探究へ



仲間との共有の場

●園庭に既にある場

仲間の中で、イメージや見立てが共有されていく。保育者は、その子どもたちによって違う場の意味を捉え寄り添っていく。

●子ども自ら作る場

他のモノと組み合わせて遊びが豊かに展開。構成した場が、ごっこ遊びなどの場になっていく。

●保育者が子どもの興味や要求に応じて作った場

イメージが共有されやすいため、誰もが参加しやすい。それぞれの遊びをしながら、新たなストーリーが生まれ、遊びと遊びがつながって豊かに展開する。

遊びが豊かになる



同じものを身に付ける

●身近にあるモノを生かして・・・

例：スーパーの袋を背中に背負ってパラシュート
防災頭巾が消防士のイメージ

●子ども自ら作ったモノ

自分で作れたことや友達と一緒にすることが嬉しくて、どこに行っても着ている。次第に、必要な物を工夫して作って遊びが深まる。「○○みたいな○○をつくりたい」と、具体的なイメージがもてるようになり、表現が豊かになる。

同じものをもつ

●遊ぶ場や作ったモノがあることで、友達とのやり取りが生まれ、イメージが広がる。

●保育者も同じモノを作り、子どものイメージに添って関わる。一人一人の姿を受け止めそれぞれの考えや工夫を認めていく。

仲間意識・イメージの共有が豊かな体験となる

5歳児との関わりから広がる姿

●ごっこ遊び（イメージや楽しさの共有）

他学年の担任との連携が必要。保育者も客として関わり、子どものアイディアを受け止め、一人一人の楽しさに共感する。リアルな道具があることで経験がない子どもも楽しめる。動きの真似から、自分たちなりのごっこが生まれる。



表現遊びから広がる姿

●自分で作る面白さや友達との関わりが生まれる喜びへ

今までの経験を生かして、自分でお面やしっぽなどを作る姿、友達とのやり取りや表現も工夫する姿につながる。自分のやりたい役になりきる姿に共感し、一人一人の取り組みを認めていく。他者に見せて認められる喜びが自信になる。一人一人の思いや願いに添った援助をしていく。



ルールのある遊び、運動的な遊び

●場やルールを作っていく過程を大切に

- ・ルールを始めから保育者が提示するのではなく、遊ぶ過程で、問題や必要感から生まれる話し合いや5歳児に教えてもらう機会を大切にする。安全確認を子どもと一緒にやっていくことで、次第に自分たちで自主的に安全配慮する姿が生まれていく。
- ・自分なりの楽しみ方で遊び、イメージをもったり、新しいことにチャレンジしたりする姿を受けていく。



家庭での体験から広がる姿

●実現できるモノや場がある

地域のお祭りや行事に参加。園でもやりたいと、作って遊んだり、旅行での経験やお店屋さんに行ったことを再現したりして楽しむ。子どもたちの「こんなふうにしたい」という思いを受け止め、新たな材料を出していくとよい。



子どもの遊びを支える保育者の環境づくり

- ・子どもが自由に関われる魅力的な素材・材料・教材
- ・興味を深めたり、イメージを豊かにしたりするモノ・場・時間
- ・子どもの実態や思いや願いに添って環境を構成・再構成する保育者
- ・夢中を支える保育者の関わり（追求・探求探究・遊び込む・遊びに浸る）
- ・自然との出会い、本物との出会い、心揺り動かす機会の工夫
- ・人と人と関わりが生まれる場と時間の保障
- ・気持ちの切り替えができる場やくつろげる場の必要性
- ・保護者や地域との関わりや協力

グループワーク

あそびが豊かになったと思われるきっかけ

『おべんとう』の絵本を読んだ後「お弁当を作りたい」と、お弁当作りが始まった。

箱を弁当箱に見立てたり、画用紙をご飯に見立てたりなど、自分のイメージを形にしようとしていた。

中にはご飯のイメージにこだわりを見せ、「粒つぶして盛りあがっている」と言って、保育者と一緒に試行錯誤しながら考える子もいた。素材の提供は子どもの思いと共に用意していった。



「子どもの遊びが楽しかった」「豊かになったモノやコト」について、ワークシートを基にグループで話し合い、発表して研修生と共有しました。多様な視点から、4歳児の子どものたちの生き生きとした遊びの姿が語り合われていました。

研修生の報告書より

保育士自身が子どもの遊びに興味をもち、共に考え、探究心をもつことが大切である。子どもたちの世界を保育者も一緒になって楽しんでいくことで、子どもたちの遊びの広がり支えていくことができるのだと学んだ。子どもたち自身で考え、試すことを支えていながら、保育者もその遊びに夢中になることで、遊びがより深まっていくのだと感じた。

自分と他者の違いに気づき始め、好きな遊びや友達がはきりしていく。その中で意見や思いがぶつかることもあるが、これは相手の気持ちに気づき理解する大切な経験だと感じた。保育者は子どもたちの思いを受け止め、丁寧に関わることが必要だと改めて学んだ。体験を乗り越えることで自信や次の意欲につながるため、安心して気持ちを切り替えられる場を用意することの重要性を再認識した。

（日色先生より）保育者として「子どもの視点に立つ」「子どもの世界を共に楽しむ」という、先ず幼児を深く理解しようとの温かい眼差しが伝わってきます。また、友達との関わりを通しての葛藤体験を成長の機会として捉え、寄り添いながら丁寧に関わることの重要性を、将来的な育ちを見据えて理解されている点も印象的です。さらに、研修での学びを自身の保育に還そうとする姿勢が感じられます。これらは参加者皆さんに共通している姿勢であり、子どもたちの体験をより豊かにする保育を工夫しようとする探究心の表れです。報告書を通して、皆さんの学びが着実に深まっていることと保育への熱意を改めて実感しました。